「自分は地域社会の一員だ！」と自覚できる児童の育成

―地域の人や物に直接触れ、関わる活動を通して―

千葉市立源小学校　教諭　伊藤　文人

１　はじめに

令和２年度より、新学習指導要領が全面実施となり、「主体的・対話的で深い学び」が重視されるようになった。

「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」の他に、新学習指導要領は「学びに向かう力、人間性等」の育成を掲げていて、小学校第３学年及び第４学年では、「地域社会に対する誇りや愛情」と「地域社会の一員としての自覚」を養うことが目指されている。

千葉市が一般市民に向けて実施した 2019 年度のアンケートでは、「千葉市には都市アイデンティティがあると思うか」で約 50％の市民は「思わない」と回答している。自分の住んでいる街に魅力を感じなければ、自分が魅力を感じる他市へ移り住むと考えられる。その結果、人口減少が進む事態となる。そうならないためにも、「地域社会に対する誇りや愛情」と「地域社会の一員としての自覚」は必要だといえる。

そこで、初めて社会科を学習する小学校第３学年において、地域の人や物に直接触れ、関わる活動を行い、地域社会に対する誇りや愛情を育てる基盤を養いたいと考えた。そして、「自分は地域社会の一員である。」という自覚を高めたいと思い、本実践を行った。

２　実践の内容

(1) 児童の実態

児童に、「自分が住んでいる地域は好きか」と聞いたところ、28 名中 20 名が「好き」と答えた。しかし、「地域のどこが好きか」と聞いたら、「(登校時のセーフティウォッチャーへの) あいさつが返ってくる」と答えた児童が８名で、７名が無回答だった。他は少数意見であり、特に地域が好きかどうかということに考えを持っていないことが推測できた。

また、「現在、地域のために働いてみたい」が 19 名、「地域行事に参加したい」が 27 名いたが、地域行事で知っているものには、11 名が「何も知らない」と答えた。実際には毎年夏まつりや「みつわ台さくらまつり」が開催されているので、３年生の発達段階として、地域のことについて理解できていないことが分かる。

(2) 実践の目的

第３学年「市の様子と人々のくらしのうつりかわり」の単元で、地域の様子や課題について知り、自分がどのように関わることでどのような街にしたいか考えるような授業を構想し、実践することを通し、「地域社会に対する誇りや愛情」と「地域社会の一員としての自覚」の育成過程とその実態を明らかにする。

(3) 実践の方法

本実践では、社会参加学習を通して、児童の自覚を育成していこうと考えた。

社会参加学習には、次の五つの必要条件があると示している（唐木 2010)。

A 地域社会の課題を教材化すること

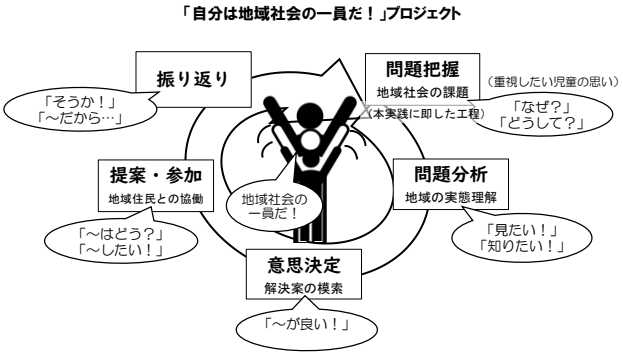
B プロジェクト型の学習を組織すること

C 振り返りを重視すること

D 学問的な知識・技能を習得、活用する場面を設定すること

E 地域住民との協働を重視すること

そこで、本実践では、この五つの条件を学習に組み込むような社会参加学習を構想し、実践した。



［図１］本実践の全体構想図

一回実践を行えば地域社会の一員である自覚が確立できるわけではなく、何回もスパイラルしていく中で徐々に成長していくものだと考えた。よって、３回の授業実践を通して変容を追った。

(4) 単元の評価規準

［表１］本単元の評価規準

知識・技能	市や人々の生活の様子は、時間の経過に伴い、移り変わってきたことを理解している。
思考・判断・表現	市や人々の生活の様子を捉え、それらの変化を考え、表現している。
主体的に学習に取り組む態度	市の様子の移り変わりについて、学習問題を追及し、解決しようとしている。 学習したことを基にこれからの市の発展について考えようとしている。
感性、思いやりなど	地域に愛着を持ち、これから自分の地域に関わっていこうと考えている。

以上の評価規準の中で、今回は「主体的に学習に取り組む態度」に特化して、A・B・C の評価基準を作成して、児童の評価と変化を見取っていった。

また、「感性、思いやりなど」については、個人内評価として実施するものとされている。本実践では、全ての実践が終わった後に、抽出児童について、学習の振り返りや発言を評価した。

(5) 授業実践

①校名や町名の由来を調べよう

ア 実践内容とねらい

本校は源町にあり、児童の居住地は源町とみつわ台である。この町名について、どのような経緯で名付けられたのかを調べた。また、人のつながりを感じられるための手立てとして、児童の親や祖父をゲストティーチャーとして招き、子供だった当時の様子を話してもらった。

これらを通して、地域に対する誇りや愛情を育成したいと考えた。

イ 実践の様子

［資料１］ゲストティーチャーから昔の話を聞いている様子

自分が住んでいる地名の由来を知ったり、その由来と校歌の歌詞が関連していることを発見したりすることで、地域への興味を高めることができた。

映像資料で昔の土地の様子を見たことや、親や祖父が子供であったころの様子を聞くことで、時代と人のつながりを感じることができた。

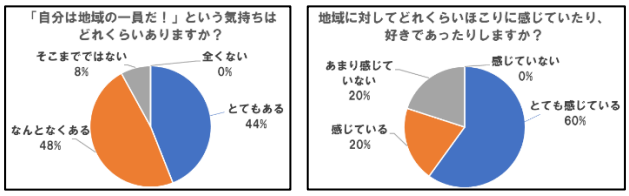
ウ 評価

［表２］実践①の「主体的に学習に取り組む態度」の評価基準と評価

A	地域社会の一員であることを自覚し、地域のために何ができるか明確に示そうとしている。どのような社会が望ましいか考え、そのためのプロセスを示そうとしている。	15%
B	地域社会の一員であることを自覚し、地域のために何ができるか書き表そうとしている。どのような社会が望ましいか考えようとしている。	56%
C	地域社会の一員である自覚を持ったり、地域のためにできることを考えたりしようとしていない。	29%

地域の様子や移り変わりを知ることはでき、地域社会の一員であることの自覚は高まったが、地域の課題についてまでは考えることができていなかった。

エ 意識調査



［図２］実践①を行った後の意識調査

児童の地域に対する意識はとても高かった。地域を知ることはできたが、誇りに感じるまでは至っていない児童もいた。

②地域のお祭りミーティングをしよう

ア 実践内容とねらい

前実践の振り返りにおいて、児童から「地域の行事を調べたい。」「地域に関わりたい。」というような言葉が出てきた。

そこで、地域の祭り実行委員である A 氏に協力を仰いで、祭りの現状や課題を一緒に考えた。方法としては、新型コロナウイルスによる緊急事態宣言中であったため、インターネットを使ってオンラインで実施した。

これらを通して、児童の地域社会に対する意識をさらに高めようと考えた。

イ 実践の様子

インターネットを使ってオンラインで、教室に招くことと同様の学習ができた。

児童はこれまで何人もが祭りに行ったことはあるが、運営側として地域行事を考えることで、視点を変えて考えることができた。

「祭りに来る若い人の数が減少しているので、どのような方法をとれば良いか。」という A 氏の問いかけに対し、「参加賞をつける。」「写真を撮りたくなる出店にする。」等、多くの児童が積極的に意見を出していた。

振り返りにおいて、「自分も実行委員として参加したくなった。」「今度祭りが開かれるときには必ず参加したい。」という意見が出ていた。

［資料２］オンラインで A 氏と話し合いをしている様子

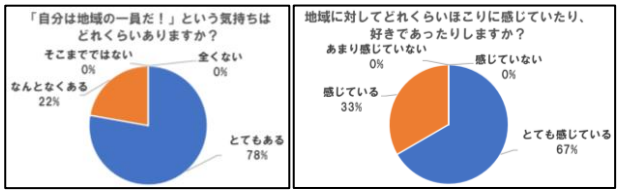
ウ 評価

［表３］実践②の「主体的に学習に取り組む態度」の評価基準と評価

A	地域社会の一員であることを自覚し、地域のために何ができるか明確に示そうとしている。どのような社会が望ましいか考え、そのためのプロセスを示そうとしている。	26%
B	地域社会の一員であることを自覚し、地域のために何ができるか書き表そうとしている。どのような社会が望ましいか考えようとしている。	56%
C	地域社会の一員である自覚を持ったり、地域のためにできることを考えたりしようとしていない。	18%

前実践において、地域の課題を考えられなかった児童も、今回は明確な相談があったため、考えを示しやすくなった。そのため、全体的に地域社会の一員としてどのように関わっていけるか、また関わっていきたいか考えられていた。

エ 意識調査



［図３］実践②を行った後の意識調査

前実践から、さらに児童の意識は高まった。地域の現状や抱える問題について、主体的に関わることができたためだと考えられた。

③人が集まる地域をつくろう

ア 実践内容とねらい

実践②において、コロナ禍であるため、祭りに関する活動はできなかった。本校の教育課程においても、全校児童による地域清掃が中止になった。しかし、学級単位の活動は可能であったことから、地域への社会参加学習として、地域清掃を取り入れた。それと同時期に、児童から学級に設置してある学級会の提案ボックスに「地域の掃除がしたい」と発案があった。

後日学級会において、地域のどこを掃除したいか話し合い、実践①後に見学した、「源」の地名と関わっている神社を掃除することとなった。神社を掃除し、帰りに商店街の道も掃除した。

地域の象徴である神社を掃除し、人が集まる商店街を掃除することで、地域貢献をしている気持ちを高めさせ、地域社会に対する愛情や、その一員である自覚を高めようと考えた。

イ 実践の様子

意欲的に掃除に取り組みながら、再度、記念碑や石碑の内容を見ることで、歴史がつながっていることを感じていた。

すれ違う通行人に欠かさず挨拶をして、通行人から何をしているか聞かれた際には、「地域のために掃除をしています。」と答えることができていた。何人もの地域住民から度々褒められることで、充実感を得ていた。

［資料３］地域名の由来である神社の記念碑を掃除している様子

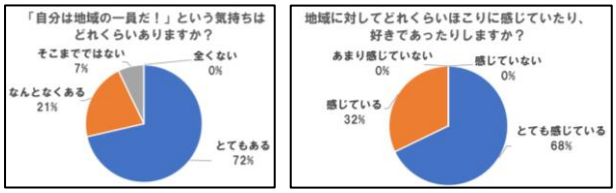
ウ 評価

［表４］実践③の「主体的に学習に取り組む態度」の評価基準と評価

A	地域社会の一員であることを自覚し、地域のために何ができるか明確に示そうとしている。どのような社会が望ましいか考え、そのためのプロセスを示そうとしている。	19%
B	地域社会の一員であることを自覚し、地域のために何ができるか書き表そうとしている。どのような社会が望ましいか考えようとしている。	55%
C	地域社会の一員である自覚を持ったり、地域のためにできることを考えたりしようとしていない。	26%

清掃活動では、児童の充実感を得ることはできたが、地域の発展について深く考えることはできなかった。

エ 意識調査



［図４］実践③を行った後の意識調査

本実践では奉仕活動であったため、実践②より意識が下がったと考えられた。

(6) 感性、思いやりなどに関する個人内評価

３名の抽出児童について、学習の振り返り、学習中や学級会の発言内容を基に個人内評価を行った。

抽出の仕方は、三つの実践の意識調査から、他児童より低かった児童（A 児）、他児童より高かった児童（B 児）、高低両方の傾向が見られた児童（C 児）とした。

［表５］三つの実践における抽出児童３名の振り返りや発言内容

	A 児	B 児	C 児
実践①	昔は緑が多かった。（振り返り）	昔はどこで遊んでいたのですか。（発言）	紅嶽弁財天を見に行きたい。（振り返り）
実践②	今度祭りに行ってみたい。（発言）	来た人に参加賞をあげたら良い。（振り返り）	将来、祭りの実行委員になりたい。（発言）
実践③	たくさんの人が集まってほしい。（振り返り）	人が集まる大通りをきれいにしたい。（発言）	もっと活動を行いたい。（発言）

本実践前の調査では、特別な理由なく「地域が好き」という児童が多かった。しかし実践後には、A 児「たくさんの人が集まってほしい。」、B 児「来た人に参加賞をあげたら良い。」、C 児「将来、祭りの実行委員になりたい。」というように、どの児童においても、具体的な地域像を描くことができていた。このような姿は、地域社会の一員である意識の表れと言える。

抽出児童だけでなく、「放課後、団地のみんなで集まって清掃活動をしたい。」や、「学習内容をパンフレットにして、近所に配布し、地域を知ってもらいたい。」と考えた児童もいて、多くの児童において、地域社会の一員であるという意識の表れを見取ることができた。

３ 実践のまとめ

(1) 成果

今回は、実践の方法で示した五つの条件を学習に組み込み、地域社会に対する誇りや愛情、地域社会の一員である自覚が高まるか検証した。

［図２］～［図４］より、学級のほとんどの児童が地域に対して関心を深め、地域社会の一員である自覚を高めることができた。

個人内評価においても、地域に対して主体的に関わろうとする態度が高まった。前述したように、これから地域のためにできることを具体的に考えるようになった児童が多くいた。

本校では、社会体育振興会が主催する行事もいくつかあり、関心がそちらまで広がっている様子も見られた。

(2) 結論

このような結果を踏まえ、小学校第三学年児童に地域社会に対する誇りや愛情、地域社会の一員である自覚を高めるためには、地域の様子や課題について知り、自分がどのように関わることでどのような街にしたいか考えるような授業が有効であると提言したい。

その授業の中で、地域住民との関わりや地域教材へのアプローチの仕方を積極的に進め、課題の発掘や解決方法の模索をしていくことが大切であると考える。

(3) 課題

本校は単学級であるため、本学級１クラスでのみの実践となった。この実践をより多くの児童に対して実践することで、今回の実践の有用性を高めていけると考える。

また、地域社会は場所によって様子が異なるため、その学校に合わせた学習内容を模索しなければならない。

【主な引用／参考文献等】

・文部科学省『小学校学習指導要領』2017
・国立教育政策研究所『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』2020
・総合政策局総合政策部都市アイデンティティ推進課『平成 30 年度 第 12 回 WEB アンケート調査報告書「都市アイデンティティ（千葉市らしさ）」』2019
・唐木清志『社会参画と社会科教育の創造』学文社 2010